

## 調査報告

天理図書館綿屋文庫蔵心敬自筆『連歌百句付』

日時 平成21年11月6日(金)

場所 天理大学附属図書館(天理市柚之内町 1050)

調査者 伊藤伸江(代表者)・奥田勲(分担者)

### 【書誌】

卷子本、一軸。表紙は蜀江花紋木綿表紙。紙高は23.3cm。本文全二十紙、一紙に十一行、一句を一行に書いてある。料紙は鳥の子。元は冊子本(綴葉装か)であったものの料紙を表・裏にはぎ、卷子本に改装している。卷子本への装丁時期は江戸時代であろう。料紙に見られる汚損は、卷子に表装した時期以前のものである。また、料紙の七枚目、八枚目は本来九枚目、十枚目の後に入るべきものであり、改装の際の錯簡が生じている。

端見返しの左上に後人の墨書「心敬大僧都正筆／宗祇法師之師に而／手蹟稀也」、左下に「わたやのほん」の印記がある。

奥見返し表下に印記「月明荘」。奥見返し裏に「大日本史料第八編之八に出せる／写真版の原本なり／南天荘主人通泰」と記されている。当該大日本史料写真版の説明には、東京赤星鐵馬氏所蔵と記され、明治時代の実業家赤星弥之助の息子鐵馬から、関東大震災後井上通泰の所蔵へとうつり(後述)、弘文荘をへて天理図書館に入ったことがわかる。

被せ蓋の桐箱入。また、箱の中に昭和三年二月十九日付井上通泰宛山田孝雄書簡の写しがある。

連歌百句付

つららと山にのぼるの雲  
かたあふとくたり花のあふれ  
身の去るのちのちの神  
世にまじりてはどしどし  
かたあふとくたり花のあふれ  
善にあふれとてをやりあ  
冬にのちのちのちのちのち  
これとて家よいのちのち  
秋のちのちのちのちのち  
神のちのちのちのちのち  
舟のちのちのちのちのち  
花のちのちのちのちのち  
とてとてとてとてとてとて

右のちのちのちのちのち  
沙のちのちのちのちのち  
五のちのちのちのちのち  
心とてのちのちのちのち  
唯情のちのちのちのち  
別とてのちのちのちのち  
享仁三年 六月五日  
右一帖 依藤 宗元 宗元 宗元  
左三馬 宗元 宗元 宗元



「連歌百句付」(れ 3・1-21)  
本文冒頭(第一・二紙)及び奥書部分(第二十紙)  
「天理図書館開館70周年記念展―宗祇・芭蕉・西鶴とその周辺―」  
(平成 13・5・天理ギャラリー発行)より転載

〔内容〕

『連歌百句付』は、心敬が『百番連歌合』から、前句と自作の付句を抜き出し、応仁二年(一四六八)六月二十五日に書写し、同年九月二十五日に宗沅禅門に与えた書である。『百番連歌合』は、百句の前句に救済と周阿がそれぞれ付けたとされる句に、二条良基が加点した連歌合であり、『心敬有伯への返事』の記述「此度救済法師周阿の句合を披見し侍る」によっても、心敬がこの連歌合を見ていたことが知られる。該本の奥書には

右前句にて救済周阿句を合侍て二條大閤

御墨など申侍る頗金玉也然さやかたき

所望により前句を贖侍り兩賢前句の

心こと葉の髓齏とりつくし給侍れは一塵も前句

餘情残へきにあらすことに頓作外見憚多

即可被捨破者也

應仁二年六月廿五日

右一帖依競望宗沅禅門白地染短筆

頗左道 / \

應仁二曆暮秋末五日 隱士心敬(花押)

と記され、完沅への譲渡の経緯がわかる。

書写態度は厳正で、字に乱れがなく、誤りが非常に少ない。以下、句番号を貴重古典籍叢刊『心敬作品集』(昭和四七・角川書店)所載翻刻に依り示すと、例えば、見せけち記号は三カ所のみ、即ち二四二三句、二四九三句、また『心敬作品集』には落ちていたが、二四七〇句「た」の字左に見せけち記号があるのみである。このうち、二四二三句、二四九三句はいずれも推敲による自句(付句)の語句の変更を記しており、単なる書き誤りではない。二四七〇句は前句であるが、「かゝらんとてそ身はのかれたり」の「た」字右に「イけ」と異本注記があり、「のかれけり」を正しいとしたか。異本注記は、二四七〇、二四八二句の二つの前句にあり、心敬の拠った『百番連歌合』の伝本に既にあつたものか。

なお、本書は天理図書館綿屋文庫俳書集成<sup>35</sup>『諸家自筆本集』(一九九九・天理大学出版部)に影印が収められ、貴重古典籍叢刊『心敬作品集』(昭和四七・角川書店)に翻刻がある。いずれも錯簡を正し、簡単な解説を付しているものである。

〔天理本調査余滴 井上通泰と山田孝雄の交流〕

天理本『連歌百句付』には、井上通泰宛山田孝雄書簡の写しが添えられている。この写しは、天理図書館貴重書主任であつた木村三四吾氏が昭和二十三年に書写したものである(注1)。書簡の内容は、昭和三年二月山田孝雄氏が井上氏新著惠贈を謝し、井上氏蔵当該卷子本を借りて写し、心敬の花押も山田氏の花押帖に取ったとの由である。この時、山田氏が写した新写本は、現在富山市立図書館山田孝雄文庫に収められてい

る(W911.2・シ・1913)。その奥書によれば、昭和三年三月十九日夜に写し終えている。さらに、山田本には、昭和三年三月廿二日付山田孝雄宛井上通泰葉書が付属し、葉書の文面によって、天理本『連歌百句付』がある年東京美術倶楽部の売立に出、大日本史料への大正八年の掲載を経て、大震災後に井上氏蔵となったことがわかる。赤星家は大正六年に三度の売立を行なっており(注2)、そのいずれかの際に出たのであろう。井上通泰は昭和十六年八月に七十五歳で亡くなっており、『連歌百句付』は、終戦後の混乱期に天理図書館に入ったものであるうか。

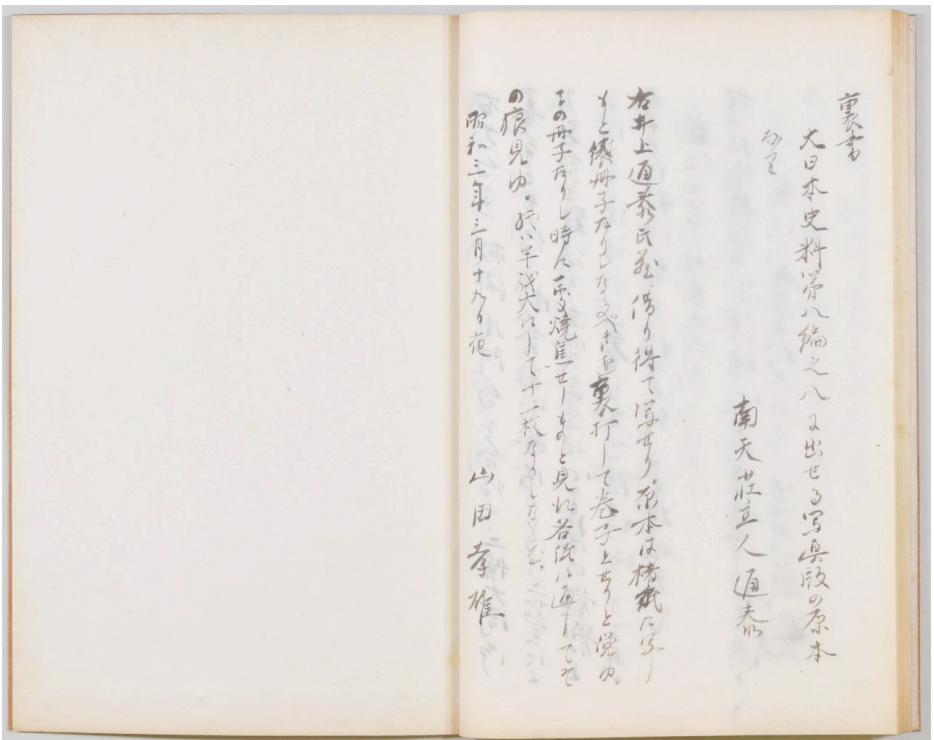
井上通泰(慶応二(一八六六)〜昭和十六(一九四一))は、医業の傍ら歌人として御歌所寄人をつとめ、また万葉集、風土記等の古典研究をなした  
在野の国文学者であった。彼が明治四十三年から始めた「南天荘同人会」での万葉集の講義は、私刊本(昭和二年六月まで三十八冊刊行)を経て、昭和三年、『萬葉集新考』として国民図書株式会社より三月六日に公刊される。天理本付載の書簡写しにある新著はこのことであろう。『萬葉集新考』の公刊により、彼の学問の成果が世に知られるが、一方、山田孝雄も同じく昭和三年に『萬葉集講義卷第一』を寶文館より刊行している。両者の間でいちはやく著書を介しての交友があったことは興味深い。

著名な国語学者である山田孝雄(明治八(一八七五)〜昭和三三(一九五八))は、昭和二年に論文「日本文化における連歌の位置」、「連歌研究の序説」、昭和三年に「連理秘抄解説」を著し(注3)、連歌研究に踏み込んでいく途上にあり、「片端」(昭和三年一月六日書写)、「知連抄」(昭和三年八月廿四日書写)と、連歌書の書写を精力的になしていた。山田本『連歌百句付』はまた、『山田孝雄年譜』等からうかがえる山田孝雄の多数の業績の陰にある、研究成果へと結実する日常のたゆみない研鑽の一端を見せてくれるものであろう。

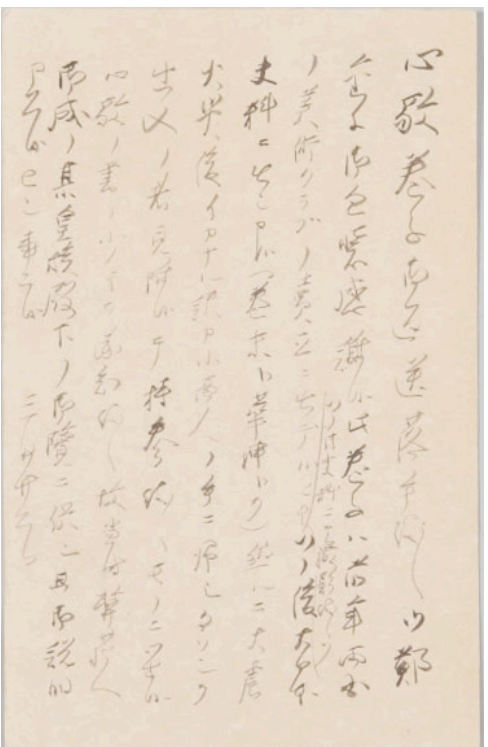
注1 天理図書館奉仕部参考業務掛(加藤様)よりの平成二十二年一月二十日付メール回答に依る。

注2 『東京美術倶楽部百年史 美術商の百年』(平成十八・東京美術倶楽部)。ただ、計三回の売立目録『赤星家所蔵品入札』(大正六・審美書院)には記載が見られない。

注3 『山田孝雄年譜』(昭和三十四・寶文館)



山田文庫本  
心敬僧都百句付 山田氏奥書



井上通泰より山田孝雄宛葉書